

## 武丁時代甲骨文にみる神と王

吉池孝一

一

今から三千数百年前、亀の甲羅や牛の肩胛骨などに文字が刻み込まれた。古代殷王朝の甲骨文字史料です。王もしくはそれに準ずる人が、農業耕作や戦争の正否などにつき、神々の意志を問うた占いの記録で、私たちはこれにより神と王との関係はどのようであったか、すなわち古代東アジアにおける宗教と政治のありようはどのようであったか、その概略を知ることができます。このような、文化という面からみれば自らの遠い源流の一つと言ってもよい古代の殷王朝は、東アジアに生活するものにとって気になる存在といえましょう。昨年、この方面についての絶好の研究書が文庫本として復刊されました。伊藤道治氏の『古代殷王朝の謎』(講談社学術文庫。2002年もと1967年)です。本稿では『古代殷王朝の謎』の「第1章 殷の神々」を中心に、甲骨文第一期武丁時代の神々と殷王との関係について考えてみます。

殷(商)王朝			
時代区分			
早期(二里头期)			
中期(二里岡期)			
晩期(小屯期)			
第一期	19 盤庚	20 小辛	21 小乙
	22 武丁		
第二期	23 祖庚		
	24 祖甲		
第三期	25 廩辛		
	26 康丁		
第四期	27 武乙	28 文丁	
第五期	29 帝乙	30 帝辛	

甲骨文有り ↓

図1

図1をご覧ください。殷王朝の文化は、早期(二里头期)、中期(二里岡期)、晩期(小屯期)の三つに分けられます。晩期(小屯期)は、殷が安陽の小屯付近に都を置いた第19代盤庚から第30代帝辛(紂王)までとなります。甲骨文が出現したのはこの晩期であり、安陽からは、十数万片ともいわれる甲骨の断片が出土しております。これらの断片は、中国の董作賓氏に端を発した研究により、第一期から第五期までの五つの時代に分けることが可能となっております。その時代区分によりますと、これまでに発見されたものは第22代武丁以後のものということになります。

さて、甲骨文は、穀物の実りの善し悪し、天候、戦争の行方、崇りの有無、10日毎の吉凶などさまざまな内容につき、占いを通して神々の意志を問うた記録です。この甲骨文には、「帝」、「自然神」、「祖先神」という三種の神が現れます。今回は、この三種の神と殷王・殷人との関係がどのようであるかを問題とします。

二

中国の甲骨学者である陳夢家氏は『殷虚卜辞綜述』(1956年)で、神々を「天神」「地示(地祇)」「人鬼」の三種に分類しました。研究者の間ではこの陳氏の分類が広くもちいられているようです。「天神」のなかに最高神である帝が含まれております。おおむね、「地示」

は自然神に、「人鬼」は祖先神にあたります。この内、「人鬼」の扱いが問題となります。「人鬼」のなかには殷王の祖先が含まれ、その祖先は大きく二つに分かれます。一つは「先公」と呼ばれるもので、上甲(祖先名)以前の神話的な遠い祖先です。いま一つは「先王」と呼ばれるもので、上甲以降の存在した可能性の高い祖先です。陳夢家 1956 は先公と先王、王の配偶者、即位していない傍系の先祖、先王の臣をもって一グループにまとめ「人鬼」とします。一方、伊藤 2002 は、陳氏の言う「人鬼」から上甲以前の先公(神話的祖先)を切り離します。そして、その先公と「地示」を併せて**自然神**とします。次に先公(神話的祖先)を除いた「人鬼」の残りの部分を**祖先神**とします。三つ目に最高神の**帝**をたてます。

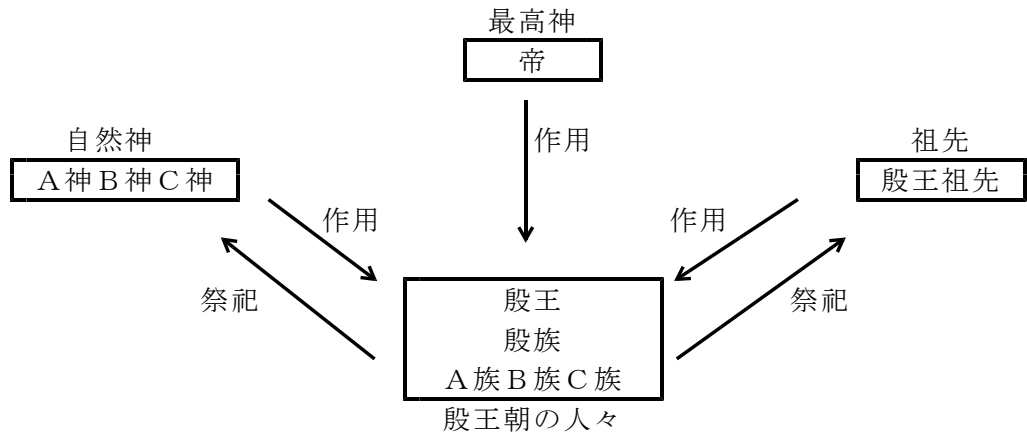


図 2

**帝**：帝の働きには、雨や旱を支配し作物の実りを左右するという自然現象をつかさどる面と、戦争や都市の建設において殷の人々を助けたり禍を降したりする面すなわち人事に関わる面があったようです。

自然現象：丙子の日にトシ、穀(𠂔)がとう、翌丁丑の日に帝がそれ雨ふることを命ずるか(合 14153)

人事：丙辰の日にトシ、穀(𠂔)が貞(と)う、帝がこれこの邑(𠂔)を終しめんか(合 14210)

さて、陳夢家 1956 や伊藤 2002 や池田末利 1992(「商末上帝祭祀の問題—享祀説の批判と不享祀の原因—」『東洋学報』第 72 巻第 1・2 号)によりますと、興味深いことに、帝は殷人に対して力を下すのですが、祭祀を受けたことを明瞭に示す資料はないようです。自然神や祖先神は盛んに祭祀の対象となっていることからすると、より高位の帝が祭祀の対象とならないというのはなぜか、一つの謎といえましょう。池田末利 1992 は、帝は抽象的・理論的存在であることから儀礼が欠如していたとの仮説を提出しております。伊藤 2002 は、帝は祭祀などによってはその意思を左右できない絶対的な神として考えられていたためであろうとしております。

**自然神**：自然神につきましては、農作物の実りや降雨など自然現象にかかわる甲骨文が多数を占めております。これより自然現象をつかさどっていたとみることができます。

戊午の日にトシ、賓(𠂔)が貞(と)う、祭りて年(み)りを岳・河・夔(自然神)に求めんか(合 10076)

先ず上の例からも分かりますように自然神は祭祀を受けます。この点帝とは異なります。さて、自然神につき、注意すべき点が二つあります。第一点目は、自然神の名と同じ族名・地名が甲骨文にみえるということです。これに拠り、自然神のあるものは、もと殷王朝以外の諸族によって祭られていた神であり、征服の過程で殷の祭祀にとり入れられたとみることができます。

己卯の日にトし、出(出)が貞(と)う、今日、王それ河(地)に往かんか(合 23786)

丁卯の日に、婦\*(姓名)が二対を示せり。岳(ト骨の管理者。歳名)(合 13854)

第二点目は自然神に対して「帝とよばれる祭祀」が行われているということです。伊藤 2002 はこれにより帝の機能が自然神と同じであった、すなわち帝はもと殷の自然神であったとします。もっとも、この儀式の内容は不明です。

・・・河(自然神)に帝せんか(合 14531)

貞(と)う、王亥(自然神)に帝せんか(合 14748)

以上の二点により伊藤 2002 は、殷の王朝が発展し各地を征服するにつれて、その地の自然神をも祭祀のうちにとり入れ異族との間に連帯意識を表明し、同時に殷の自然神である帝のもとに諸族の自然神を組み入れ、その支配を有効にしようとしたと述べます。この仮説自体に異を唱えるものではありませんが、第二の論拠にはやや無理がありように思えます。「帝とよばれる祭祀」が多く自然神に対して行われるという傾向は確かにあるのですが、次ぎに例を挙げますように第一期武丁時代の甲骨文では先王や旧臣も「帝祭」の対象となっております。

癸未の日に、下乙(妊)を帝せんか(合 22088)

三犬をもって黄爽(睪)を帝せんか(合 3506)

**祖先神**：武丁期の祖先の働きの特色は、王をはじめ生人に対する「たたり」ということのようなのです。

乙亥の日に貞(と)う、大庚(馘)がたたりせるか(合 31981)

貞(と)う、齒を疾めり、父乙(馘)に祭らんか(合 13652)

伊藤 2002 によりますと、祖先神について注意すべき点は、王などの生人に直接「たたり」をする資料は全て武丁時代のものであるとのことです。姚孝遂 1989(『殷墟甲骨刻辞類纂』中華書局)の索引に拠り調べてみますと確かにそのとおりであります。このような人間に「たたり」をする武丁時代の祖先の霊は死霊に近いといえましょう。後の祖甲時代になると祖先祭祀は一定の順序で行われます。祖先の霊を祭祀によってあらかじめ慰撫したい又それができると考えるようになった表れでしょう。これにより伊藤 2002 は祖先は死霊から祖先神に近づいたとします。図 2 ではこの考えにより祖先神とはせず単に祖先とした次第です。なお、上の例からも分かりますように祖先神は自然神と同様に祭祀を受けます。

### 三

伊藤 2002 では、武丁時代における帝と祖先との関係がはっきりしません。陳夢家(1956.p.580)は「王は祖先やその他の諸神を通して雨乞いや穀物の実りや戦争の勝利を帝にお願いした」と述べております。ただし具体的にどのようにお願いしたのか、やはりはっきりしません。この点について、池澤優 1999(「甲骨文字と殷の祭祀」『月刊しにか』1999-4.Vol.10/No.4;pp.38-43)に興味深い見解があります。それによりますと、「卜辞に

は世代の近い祖先が遠い祖先に「賓」せられ、後者が更に帝に「賓」せられるという例がある。」(p.9-40)ということです。

庚申の日に卜し、殻が貞う、翌乙巳の日に父乙(小乙)を祭るに羊を用いんか  
 貞う、咸(尗)は帝に賓せられるか  
 貞う、大甲は咸(尗)に賓せらるか  
 甲辰の日に卜し、殻が貞う、下乙(組乙)は咸(尗)に賓せらるか  
 貞う、下乙(組乙)は帝に賓せられるか  
 貞う、大甲は帝に賓せられるか (以上、合 1402 による。一部省略)

この「A賓于B」という表現を、「A(近い祖先)をもってB(遠い祖先)に配祭する」即ち「Bを祭るさいに、Aも併せて祭る」と解釈する立場もありますが、池澤優 1999 は、「賓」を祭祀を表わす動詞としてではなく、「AがBに迎え入れられる」というように解釈します。後者の解釈自体はこれまでも為されておりましたが、池澤氏は合 1402 という実例に即して一步踏み込んだ解釈をします。この史料は一つの亀甲に記されたもので、実際には父乙(小乙)に対する祭祀しか挙げられておりません。そこで、父乙に対する祈りが上位の祖先を経由して帝にまで到達するか否かが問われているのだとみます。

そして、このような祭祀の構造があったため、「殷王の祖先は人間と「帝」の間を繋ぐ唯一の〈仲介者〉であったのであり、殷王は「帝」との回路を自らの祖先祭祀として独占することにより「帝」に由来する権威の正当性を主張したのである。」(池澤優 1999.p.42-43)ということになるとします。もし上に挙げた史料「合 1402」について、このような解釈が認められるものとしますと、殷王は自らの祖先を祭ることにより人間の意志を間接的に帝に伝えることができたということになります。その模式図の構造は図3のように比較的均整のとれたものとなります。

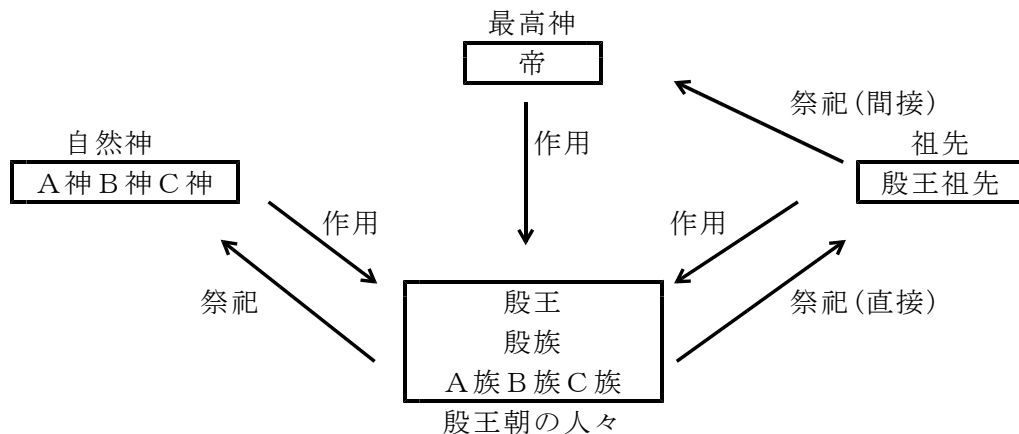


図3

#### 四

後の康丁・武乙・文丁時代には祖先の霊を帝の機能に近いものとして考えるようになったと推測することができる甲骨文があらわれます。また、帝乙・帝辛時代になると、祖先の、神としての地位が確立し、その子孫である殷王の意志がすべてに優先するかなのような甲骨文が出てきます。ですから、武丁時代において図3のようであったとすると、神と王との関係につき、後代への推移の説明が容易になります。もっとも「A賓于帝」を帝に対する配祭であるという立場からすると、帝は祭祀を受けるわけ

ですから、図 3 とは相容れない結論となります。惜しいことに「A 賓于帝」の例は、合 1402 に見られる一例のみのようなようです。謎は尽きません。